

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

命を守るって、

それは勇気ある良心の行為

戦後五十年という節目の時を迎えて、今わたしたちは過去の戦争の記憶をあらたにし、戦争の悲惨さを直視しています。

二十世紀は世界をあげての大戦争の時代でした。大量殺人がおこなわれ、人の命が虫けらのようにおしつぶされました。戦争のたびに愛する者を失った悲しみが人々の心に突き刺さりました。人が争い合うことの愚かさ、強者が弱者の命を平気で奪うことのおぞましさを身震いしながらみえています。人間の歴史に汚点を残したこの事実は、ここで最後の幕を引くどころか、もつとおそろしい場面にむかつていくのでしょうか。

く、人はまた別の形で人の命に暴力をあびせています。平和の時代だというのに、殺し合うことに良心の痛みを感じないかのようです。自分の命を大事にする一方で他人の命を抹殺して、なんの矛盾も感じないようです。生きることの情熱と殺すことの無情さが同じ人間のなかで、ふしぎに手を握りあっています。こちらの命の幸せを守るためには、あちらの命をちよつと犠牲にしてもやむを得ないと言つのでしょうか。一部の人の命を守るのはやさしいかもしれません。しかし例外なくみな命を等しく大事にするには、道徳的なことについて善と悪を正しく区別し、その判断のままに行動するためのしつかりし

た良心の鍛錬が必要で、ではいつどこで良心をそだてることができるのでしょうか。いつどこかと限定することはできません。幼い子どもにたいしては家庭と学校がその役割を受け持つべきですが、どちらもその重要な務めに不熱心です。ほかに生涯を通しての生活体験のなかで、少しずつ身につけることもできます。良心の教育は年齢、境遇、社会的役割の変化に応じて、深められるものです。このような学びの大切さを気付かせてくれる環境が、今のわたしたちのそばにあるかが問題です。公共の生涯学習コースはたくさん用意されていますが、人間として生きていく上で最も重要な良心教育の場は、どこにある

のでしょうか。キリスト者には教会でその教育を受ける権利があります。こつという各個人の、そして多くの人々の良心の訓練と学習の成果を人間の「英知」と呼びます。第二バチカン公会議の現代世界憲章に「経済的に貧しくても、英知に富んでいる国は他の国に大きな福祉を提供することができる」(十五番)とあります。こつこつという英知とは文化と同意語です。英知とは豊かな学識や高い技術とは違います。先進国であることを誇っている国々が、必ずしもすぐれた英知をそなえているとはかぎりません。私たちの国がその意味で先進国であると世界にむかって断言できるか、そつうだと胸をはつて言い切れないのは辛いことです。「命を守る」のは簡単にできるものではありません。人間としての最大の勇気が必要です。その勇気は

弱い人間の力を越えています。ある人の命が、胎児の命が突然わたしの一つの決断と行動にかかっているとかわかったとき、あらゆる誘惑にさからって、決然と自分の良心にしたがって行動できるには、前々から心構えをととのえておくべきです。

強い明らかな良心を育てるには、日頃の祈りが大事です。神のまえに頭をたれて祈る習慣がなければ、すべてに優先して神を愛し人を愛する力はわきあがってきません。祈りで武装しないかぎり悪の誘惑に抵抗できないのです。命を守ること、それは人間ののもっとも尊い行為です。

カトリック高松教区

司教 深堀 敏

いやしの作戦

ここ十年の間に、中絶後の諸問題は、中絶反対運動にとり、とても重大になって来ました。しかし、中絶反対の進め方全体から見ると、まだその中絶後の問題は専門家によって充分研究されていません。中絶反対の社会にするには、この中絶後の問題を中心にして、大切に切り扱わなければなりません。

中絶後の問題が今までおざなりされてきたのは、主として情性によるものだ、と私は考えます。これまでの中絶反対運動で伝承されてきた目的は、裁判への上告、法律上の勝利や憲法の改正を通じて、胎児の保護を回復する事にあつたのです。胎児への正当な扱いを懸念する人々から、お金が集められています。それ

は、胎児の生物学的人間性と、命を守るという道徳的必要性への人々の意識を高めるための教育に使われています。この広報活動キャンペーンは、産まれる前の子どもとの人間性を

もっと考える事で、女性達に直接中絶を思いとどまらせようと運営されています。昔からのこのやり方は、その最終目標には到底及びませんが、それなりの成果を上げています。それは、中絶のための共同資金の様な、ほとんどすべての中絶賛成の主な先導運動を阻止しました。又それは、中絶は悪だという道徳的意識を保ちました。多数の人々は、中絶は人間の命を殺す事になると理解しており、ほとんどがこの事実を少なくとも心配しています。

要するに、前からのやり方は敵を封じ込める成果は上げていますが、戦いに勝つまでには至っていないのです。この敗因は、中絶反対者達が、中間の大多数、中絶に反対でありながら同時に賛成である人々を勝ち得る事が出来ない事にあります。

(A) 中間の

大多数の人々

約70%の人が、中絶は不道徳であると認めているとされています。しかし、この同じ人々の40〜50%は、特別な場合や、単に他人、特に愛する者達に、ただ「自分達の道徳感を押し付けたくない」という理由で中絶を許してしまっているのです。彼等には、胎児への同情と女性への同情という心の葛藤がある事を、理解しなければなりません。大抵この同情によ

る葛藤は、無感覚になりまます。どの立場に立つべきか判らないので、現状にまかせて、どこにも立たないのです。

この中間の大多数の中には、もし彼等が中絶を非難したら、それは暗に彼等の妻、娘、母や友達を非難する事になる、と恐れる何千万もの人々が居ます。それに加え何百万もの人が、実際中絶に関わったという罪を抱えているのです。この後者の一部は、自分達のした事を弁明する意味で、積極的に合法的中絶を支持します。でもその他のほとんどは、恥じて沈黙を守り、犯した間違いに苦しむのです。恥じるだけでなく、もし他の人のために積極的に中絶に反対したら、偽善者になった気がするのです。だから、人々が中絶を恥じると中絶賛成者にとって有利に働いてしまふのです。つまり我々は作戦の根

本的な再構成が必要です。同じ価値観を持った人々の活動に同一視したり、誘導したり、調整したりするだけでは充分でありません。我々と部分的に同意見の人々の心を理解しなければなりません。中間の大多数の人々に、彼等と我々のゴールは一致するという事を、価値観を譲歩する事なしに説明する方法を見つけないければなりません。

始めるに当たって中間の大多数の人々の二つの主な考えを認識しなければなりません：(1)女性の権利に口を出したくない。(2)中絶した女性を非難したくない。

中間の大多数の胎児への関心は、私達と同じ考えだけけれど、女性への心配でいっぱいなのです。もし彼等の、女性と胎児への関心とをつなげれば、同時に両者のためになる様にすれば、彼等は私達と同じ立場

です。中間の大多数の二つの関心のふさわしいつながりの例に、インフォームド・コンセントの成功が見られます。これは中間の大多数の人々と、昔からの中絶反対者とは、共有する場所の一つです。インフォームド・コンセント法は先ず女性に自由な選択権を保証します。一番目に、そして間接的に、女性が自ら中絶を選ばない手助けをして、胎児を救うのです。

(B) 女性の権利での サンドイッチ

我々が女性への心配を先に、そして絶えず表わしていかない限り、中間の大多数の人々は中絶反対の意見を、真剣に受け入れようとしません。このつながりが確立して初めて彼等の胎児への想いに呼びかけ、関心を高める事が出来るのです。

例えば、前ZRCの会長ジャック・ウィルキー医学博士・夫妻は胎児の発育についての大学の講義で何年も沢山の敵意に逢った、と報告しています。彼等の中絶反対のメッセージはこちらに向けられた女性の守りの怒りの壁を突き破れなかったのです。それで過去二年間では、他にどうする事も出来なかったと中絶を選んだ女性達への彼等の関心、理解、同情を表わす五分間の前置きを話す事にしました。そして胎児の発育の話に続き、中絶後遺症や中絶後の立ち直りについての話を加えて終りとしました。

傾けられているのです：ここで彼等は新たに真剣に、この問題を見つめなければなりません。」

中絶反対者達が常に女性達に同情の念を表わしてきたのは事実です。しかし公の討論の中では、特に非友好的なメディアを通じては、この同情も舞台の裏に隠れてしまつたのです。かわりにこの争点は、女性の権利と胎児の権利との戦いだとされてしまつたのです。この間違つた世評に対する解決法は、常に女性の権利を支持する話で、胎児の議論をサンドイッチする事にあります。

前にも述べた様に、胎児を守る一番の方法は、その母親を守る事です。中絶産業は、お金のことを考え、危機にある女性達につけこむため、女性達が苦しむことになるのですが、私達がその事を教育し、女性達の苦しみをいやす事を運動の焦点にすれば、大多数

の中間の人々が抱いている女性への心配を同じようにあらわした事になります。文化の流れに戦いを挑むのではなく、その流れを我々の方へ変えて、良い方へ向く様にしなくてはなりません。

(C)

文化の逆行でなく、
流れを変える

柔道の生徒は、相手の体重やはずみを自分に有利に使う様に習います。同じ様に我々も政治的柔道の技術を、学ばなければなりません。この社会の流れの中で、我々に有利に変えられるのは何でしょうか？

先ずこの社会は女性の権利に過敏症になっており、そのやりすぎの要求を考えなければなりません。中絶賛成者は中絶による女性の苦しみを稀であると訴えています。しかし、

中絶の犠牲になつた女性達が少なからずいるという事を私達が発表する事で、女性の権利主張者と人口管理論者とを分裂させる事が出来ます。

次に、特に患者の権利の分野で個人の自治権の増加を要求し、せまる事が出来ず。女性の中絶への決断に影響しかねない情報を、温情主義的に明かさな

いと、どんな権利が、中絶施術者にあるのでしょうか？何もありません。女性は大いだから全て中絶について知る権利がありません。

三つ目に、我々は何でも訴訟出来る社会に居ます。人々はすでに、もし誰かに、特に医者

は、事実を公言するより、「たてまえ」の方が大切とされています。我々は真実を話し、社会に事実を教えなければなりません。もしこれらの動力を更なる中絶後の立ち直りに利用出来たら、神聖視された偶像である中絶を破滅する事が出来る、敵無し

(D) 力強い、

自己推進作戦

女性の権利と命の大切さを両方唱えるやり方には、強い、良い作用をするフィードバックがあります。一つの分野での成功が他の分野の成功を増し、それが又初めの分野の更なる成功につながるのです。人々の胎児への関心を増す、という従来のやり方が、岩を押し上げて登るように大変なのに対して、この女性の権利と中絶反対

の両方を支持するやり方は、下り坂で岩を転がす様に簡単です。一度初めの抵抗を乗り越えれば、社会にある流れの惰性によって、我々が目的に推進するのに必要な力を与えられるでしょう。

(1) 許す態度

まず我々の広報活動を通じて、中絶を経験した男女がいやされる環境を作らなければなりません。我々が批判がましいというイメージに対抗して、同情と理解のイメージに変えなければなりません。中絶経験者の男女には、恥ではなく、許しを感じて欲しいのです。

これを行うには先ず教会です。聖識者は中絶経験者への理解・同情の必要性に

ついて説教すべきです。それは中絶を許すという事とは別に出来ます。人は追い詰められた時に、どんなに嫌な事でもしてしまうものだ、と認める事によって出来るのです

教会に携わる者として、

女性に中絶を選ばせる大きな圧力、特に彼女等にそれしか方法がないと思わせる圧力を、我々は認識しなければなりません。彼女等が何故中絶したかを裁く必要はありません。かわりに彼女等の現在の心の状態、疑問から来る痛み、彼女等自身のあいまいさ、そして悲しみに気付いてあげなければなりません。立ち直りたいという彼女等の願望に本人達が気付いてなくとも、我々が気付いてあげなければなりません。つまり我々の彼女等への主な務めは、神の慈悲によるいやしという恵みの立会人になる事です。私達の信仰は誰をも恥の人

生に運命付ける事はないと安心させてあげなければなりません。神の御慈悲によって、誰でも希望を取り戻せるのです。

胎児の人間性と中絶の罪深さを説教の中心とする必要はありません。何故なら、その真実は、中絶を経験した人が直視しようとしなくても、暗に判っているものだからです。ですから彼女等に無理にそれと向き合わせようとするのは、不安、恐れ、恨み、怒りを悪化させてしまうだけです。つまり壁を作ってしまうのです。逆に、中絶が女性や男性にどんな影響があるかという真実を提示すれば、その壁は取り除かれます。彼女等はその真実を体験し、感じて知っているからです。自分の経験した事を、自分の所属している教会が理解していると知る事がいやしなのです。

この手段を使って、中絶

を経験した男女が一番必要とする許しへ導く事が出来ます。例えば非常な恥ずかしさに苦しんでも、後悔

ましよう。恥じるのは最小限にして、改心を受け入れましよう。

と改心の中に、自由と新しい人生がある事を知る必要があります。我々が彼女等を姉妹のように、非難する事なく、受け入れる事を再確認しなければなりません。要するに、許しのメッセージは常に命の尊厳のメッセージに先行しなくてはならないのです。

これは彼女等にとって良い事です。そして教会や中絶反対運動にとつても良い事です。中絶後のいやしを経験する人は教会を強くします。許される事を知り、宗教に対して謙虚な気持ちになり、復帰するのです。大勢が非常に高尚になります。どん底を見た人が今高い所を目指すので

ましよう。中絶を経験した男女達の証言は、他の人々に中絶後のいやしを更に求めさせ、受け入れさせるでましよう。私はいつか、中絶後のいやし運動が「批評する集団」になる日が来ると強く信じます。その時に

は、映画スターも運動選手も政治家も誰でも、彼女等のキャリアを傷付ける事なしに、過去の中絶の罪を公けに告白し、いやされた事を言明出来るでましよう。中絶後のいやしは中絶後の訴訟も推進します。沢山の男女が中絶後の許しでいやされるにつれ、沢山が恥じの意識の奴隷の身から解放されま

ではないだろうかと国民の疑いを打ち出すだけで、我々は中絶賛成者の一番有力な通念・中絶が安全であるという主張に致命的な穴を開ける事が出来るのです。中絶後のいやしについて忘れてはならないもう一つの面は、家族への影響です。多くの人が中絶について黙っているのは普通、中絶した事のある愛する家族を傷付けたくないからです。でもこの愛する家族が、中絶の悲しみについての証言を始め、又彼女等が得た許しや他の仲間も守りたいという願いを語り始めると、以前は口をつぐんでいた家族も、今は、口に出して改革を支持するので



それは、中絶経験のある男女が彼女等の胎児についての事実を直視出来るのは、彼女等が許されたと感じ、少なくとも希望を見出し、出してからだからです。

彼女等は中絶反対運動を強くもします。彼女等は中絶の危険についての証人です。読者にも分かる様に、社会的や政治的の改革を必要とする時に、実際に

は、中絶後のいやしのサーブスについて興味や要求の波が押し寄せて来るでましよう。その日には、中絶経験者達への人々の感情は、中絶「反対を唱える」裏切り者」という中絶賛成者による偏見を乗り越えてしまつてましよう。その日に

識なのです。もつと沢山の事例が告訴され勝てば、不正処置の不利さは急激に増すでましよう。中絶の安全性についての国民の関心が増加し、報道関係も中絶の健康上の危険性における議論に注目するでましよう。ただ単に、中絶は危険

この効果を見くびつてはいけません。中絶した女性への気がねから中絶について中立を守ったり、中絶反対の気持ちで隠す人々が、中絶経験者一人に

更にいやされる環境、温かく迎え入れ、非難せず、許してあげる環境を作る事によつて、もつと沢山の人が中絶後のいやしを探し求めるようになるでましよう。過去の中絶を嘆き悲しむのは悪い事でなく普通の事だ、と教えてあげ

絶した女性の証言ほど強いものはないのです。

中絶後のいやしの最も大切な面はおそらく、それが永久に存続する事で

中絶後のいやしの最も大切な面はおそらく、それが永久に存続する事で

中絶後のいやしの最も大切な面はおそらく、それが永久に存続する事で

中絶後のいやしの最も大切な面はおそらく、それが永久に存続する事で

中絶後のいやしの最も大切な面はおそらく、それが永久に存続する事で

中絶後のいやしの最も大切な面はおそらく、それが永久に存続する事で

中絶後のいやしの最も大切な面はおそらく、それが永久に存続する事で

中絶後のいやしの最も大切な面はおそらく、それが永久に存続する事で

つき沢山居るのです。中絶後に立ち直った女性一人一人が、我々の戦いに新しい仲間を連れてきてくれる事になります。これが、今は中絶についての議論に関わりたくないとする中間の大多数の大部分への我々の鍵となります。

(3) より良い真実の

文献活動

中絶後の諸問題が、中絶後のいやし運動で非常な成果を上げているのは明白です。中絶後の問題を扱うカウンセラーが患者のニーズをより理解し、より良い手助けとなるよう助けているのです。

更に、中絶の危険性がより良くまとめられ公表されると、1・患者が中絶前に、中絶が高い危険性を持つと発見し、中絶後の女性を守る良い法律を作るプロジェクトになり、2・中絶によって身体を傷付け

られた事を訴えたいとするしつかりした女性の数を増やし、3・中絶施術者の不正処置の告訴で相手側の不利な点とこちら側の勝ち目が増え、4・中絶施術者が払う保険料を増やします。

新しい研究は、我々の広報活動の拡張にも役立ちます。そのニュースは教会と世俗と両方の新聞雑誌に載ります。これが中絶後のいやしの必要性への人々の関心を高めるのです。助けを求める女性を増やすだけでなく、一般の人々の理解を高めるのです。理解を高めれば、中絶の犠牲者の気持ちを理解する事が出来、それが更にいやされやすい環境を作り、もっと沢山の女性にいやしを求めやすくするのです。

中絶の危険性への国民の関心が高まると、中絶反対者が女性を守ろうとしている事が、更に受け入れ

られるでしょう。我々は単なる「胎児愛好家」ではないのです。産まれた後も産まれる前も愛し、両方にとっての最高を望むのです。このイメージが強調され、女性を代償にする独断的な中絶賛成者としての相手側を浮かび上がらせるのです。

更に、中絶によって傷付けられた事を文献化する事は、中絶施術者の不利さを増すだけでなく、彼等の意志を失わせます。何人かの施術者は、女性を助けるというよりむしろ傷付けていると思ひ始め、中絶産業を止めたと言われています。中絶産業の全員が欲だけ動いている訳ではありません。沢山の施術者や職員は、いかに中絶が女性の人生やその家族を破壊するかに、感じ易くなっているのです。彼等は女性達を助けているのだ、という希望にしがみついているから、中絶の手助けとい

う重荷に耐えているのです。そんな妄想を捨てれば、彼等はただ悪を永続させる手伝いをしているだけだったと分かるでしょう。

結論

つ前進する過程です。でも一度最初の一步が踏み出されれば、後は人間の自然の力強さと文化の流れが我々に有利に働き、坂を転がるようにうまく行くでしょう。

これまでの伝統的な中絶反対のやり方は、静かだった中絶反対者達に行動、すなわち、自発的に申し出て、教育活動し、寄付する行動を起こさせるのには最高でした。でも、説教するだけではいけないのです。中間の大多数に、彼等に聞こえる声で、女性への関心を呼びかけなければなりません。関心を呼び起こす事で彼等を、女性と胎児の命を守る「考えの支持者に出来るのです。その時点で彼等は静かな中絶反対者となりますが、やがて願わくば、行動的になるでしょう。これは一歩づ

胎児の虐殺が黙認されて来たのは、中絶が一般的に女性の人生に有益だという主張を中間の大多数が信じているからです。でも、中絶が益よりもはるかな痛みをもたらすものだと知れば、中絶による子ども達の犠牲がどういうものか分かるでしょう。中絶は忌むべき行為です。

The Post-Abortion

Review, winter 95

手をつなぎあう必要

命についての議論

1。「いつ人間の命が始まるかは不確かです。それは厳正な疑問であり、科学で答えられる事ではありません。」

「1 A. もし、人間の命がいつ始まるかが不確かであるなら、その疑問がある限り、命を救う方に動くべきです。仮に、いつ人間の命が始まるかが不確かであるとしてもしょう。もし猟師が見て、草むらの陰の動きが、人間によるものかどうかはつきりしなかったら、その不確かさは、彼に発砲させるでしょうか、させないでしょうか？もしあなたが、夜運転していて、道の先の黒い影が、子どもかも知れない、でもただの木の影かも知れない、と思った時、そのままつかこみますか、ブレーキを踏みますか？もし、死んでいくか生きていくか分からぬ人を見つけたら、どうすべきですか？彼が生きているとして助けようとするか、死んでいるとして立ち去るか？」

「不確かさを、命を救う方へ用いるべきではありませんか？そうでなければ、これは子どもか子どもでもないか分からないから、殺してもいいでしょう。」という事になります。

1 B. 医学の教科書や科学の参考書は、常に、人間の命は受胎によって始まるとしています。いつ人間の命が始まるか医学的又は科学的な合意はないと沢山の人が言われてきました。これは間違いです。科学者の間では、受胎が人間の始まりであると

今こそ、正しい価値観と正しい道徳観念を持つ人達が、手をつなぎあう時です。中絶反対の人々は手をつなぎあう必要があります。今、そうする必要があるので、もし医者が母に説得していないかったら、私は産まれていません。母は、41才で妊娠しました。夫もいない。仕事もない。希望もない。未来もない。そんな状態で彼女は中絶のため、医者に行きました。断られたので、奇跡的に、私は産まれる事ができたのです。神は私に人生の計画を用意してくれたのです。

私達はどうかして人々の精神と心の中に、道徳と善行を教え込まなければなりません。キリスト教のリーダーを始めすべての人が手をつなぎあわなければならぬのです。

ジェイムズ・ロビンソン

いう、圧倒的多数の合意があります。(受胎とは、卵子が精子によって受精し、遺伝子的に別個の個人を作り出す瞬間の事です。) ブラッドリー・M・バツタン先生の著作、「人間の胎生学」という教科書では、「それは精子による卵子への浸透で、受精の過程上の最高点を作り上げる、それぞれの持つ結合する核物質の混合の結果で、新しい個人の命の開始を表わす。」と書かれています。キース・L・ムーア先生による胎生学の教科書では、受胎した一つの細胞について、「細胞は、卵母細胞の精子による受精で作られ、それが人間の始まりである。」と述べています。又、「私達は皆、細胞として人生を始めたのだ。」とも言っています。

生物学と産科学の研究の中で、J・P・グリーンヒル先生とE・A・フリードマン先生は、「このよう

に作られた接合体は、新しい命の始まりを表わす。」としています。

ルイス・フリッドハンラー先生は「懐胎の生物学」という医学の教科書の中で、受精について、「新しい一人しかいない個人の命の始めを表わす、あの素晴らしい瞬間」と書いています。

「胎児と幼児の病理学」という本の中で、E・L・ポッター先生とJ・M・クレーグ先生は、「精子と卵子が結合する度に、新しく生きている人間が作られ、何か特別な事が起こって死がもたらされる以外は、それは生き続ける。」と書いています。

これらの資料は確信を持って、不確かさのひとつもけらもなく、命が受胎時に始まるのであると断言します。「これらは憶測でも仮定でもなく、もちろん宗教的信念でもありません。こ

れらすべては不朽の資料です。彼等の結論は公正に、科学的・医学的事実に基づいているのです。

ProLife Answers by

Randy Alcorn

ある勇敢な若い学者

中華人民共和国は、妊娠中絶に対して資金援助をしたり、奨励したりする以上の段階にまですでに到達しています。今日中国では、数百万人の女性が、妊娠中絶を受けるように強制されている状態にあります。この中国政府による妊娠中絶キャンペーンは、ステイブ・ブーン・モッシャーという勇気のある若い学者によって初めて公に日の目を見る事になりました。79年、モッシャーはスタンフォード大学の博士課程で人類学専攻の大学院生でした。彼の聡明さと、そして、彼が中国語の方言をも話す事が出来るという事から、西側の社会学者として初めて中国の田舎で丸一年監視を受けずに住む事を許されまし

た。最初は中国に対して、彼はむしろ寛大でロマンチックな考えを持っていました。しかし中国政府の残酷な人口制御計画にぞつとさせられる目撃者となりました。

に対しては彼を博士号課程から追放するよう圧力を加えています。今日、真実を語るには大きな犠牲を必要とするのです。

例えば、モッシャーは以前、お産の床につかなければならなくなった女性達への洗脳集会や他の強制集会に参加した事がありました。そこでは、産み月に入った女性達の多くが、強制的に妊娠中絶に合意させられていました。モッシャーは中国を去り、強制妊娠中絶政策を証明する写真を掲載した記事や本を書きました。これに対し、中国政府はモッシャーに「外国人スパイ」という汚名を着せ、スタンフォード大学の人類学部

NRLJCW-0094